

## 福岡市の外国人来訪者増加に向けた施策の検証

～「福岡市基本構想（昭和 62 年度版）」を対象として～

誘導展開型

金川理一郎（経済学部 3 年）

指導教員：長田 進

本研究では、計画に遡って検証することで地方都市が戦略的に施策を行うことの重要性を再認識することと、一つの戦略として国際化の可能性を示すことで、地方分権時代を迎えつつある今日において地方都市の自立という課題に対して一つの可能性を示すことを目指した。それにあたって、まず当該期間に策定された福岡市総合計画の中から、「アジア政策によって福岡市に来訪するアジア人の人数は増加したのか」という本研究の仮説に直接影響を及ぼすと著者が考える 3 項目を抜き出した。3 項目の具体的内容は、「福岡空港の機能強化」、「博多港の機能強化」、「国際コンベンションの開催」である。次に、この 3 項目について計画と実際の施策を比較し、実施度合いを検証したうえで、成果をそれぞれ他の地方都市と比較することによって検証した。

以上の検証の結果、次のような結論を得た。福岡空港からの入国者数については国内全体の増加の潮流の中で伸びたに過ぎなかった。博多港からの入国者数については入国者数の著しい増加をみたが、入国者の国籍に大きな偏りがあり、一部の国を除いてはあまり入国者数の増加が確認できなかった。国際コンベンションについては、国内で開催されるもののうちの大部分が一部の地域に集中しており、福岡市は他の地方都市同様国内的地位はさして高くはならなかった。

本稿の構成は、第 1 章ではじめに本研究の概要と目的を述べ、第 2 章で福岡市のアジアとの関係性について地理的、歴史的背景から概説する。研究テーマ範囲の設定を行う。第 3 章にて各論点についての一般的な問題意識に関する論点整理と先行研究分析を行う。第 4 章にて本研究の研究対象を定義し、第 5 章で福岡市総合計画に関する概説と当該期間に策定された総合計画の内容を述べ、第 6 章にて具体的に検証を行い、第 7 章で論文全体のまとめと今後の研究の発展の可能性について述べる。

福岡市は福岡県の北西部に位置する政令指定都市である。福岡空港と博多港が市内にあり、いずれも

市の中心部からのアクセスが非常によい。地理的には大韓民国や中華人民共和国の沿岸部の都市と近く、博多港と釜山港との間に定期旅客航路が就航している。また、福岡空港とアジアの多くの国々との間にも国際線が就航している。

博多は古代から日本の大陸への窓口として栄え、中世には西国統治のための役所がおかれたことで西国の政治的要衝にもなった。近世から近代にかけては国内的にも国際的にも地位は低下したが、戦前から戦中の軍事的要請や戦後の引揚、復員の需要もあって博多港を中心に地位が向上した。その後福岡市は順調に成長を続け、他の地方都市の例にもれず国際化政策をすすめていった。

本研究では1987年から2003年までの17年間を研究対象期間とし、研究対象地域は福岡市に限定した。また比較対象とする都市については、各地方の中核都市と考えられる北海道札幌市、宮城県仙台市、愛知県名古屋市、大阪府大阪市、広島県広島市の5都市とした。

本研究では、当該期間の同市総合計画の具体的内容と、実際に実施された施策の内容をすり合わせ、それらの施策の効果を福岡市に来訪したアジア人の人数という指標で検証した。なお、「福岡市に来訪するアジア人数を増やす」という視点にたって見た場合直接影響を与えると考えられる福岡空港の機能強化、博多港の機能強化、コンベンションの開催誘致の3項目に限定して検証した。

以上の検証を行った結果、次のような結論を得た。福岡空港については、機能強化を部分的な解決に漕ぎ着けることしかできず、大規模な増設に着手できなかった。入国外国人数については国内の他都市に比べて特出した成果は得られなかった。博多港については、旅客港の集中化と旅客施設整備、外航旅客航路の就航などがあり、また特定重要港湾、中枢指定港湾に指定されるなどハード面、ソフト面での整備が進んだ。入国アジア人数に関しては年を追うごとに著しく伸びていったが、特に1990年代半ば以降は入国者の9割近くを韓国人が占める一方で、他国からの入国者はあまり伸びなかった。国際コンベンションについては、全体の件数は依然として国内の全開催件数の大半が一部の都市に集中している状況であり、福岡市の国内的地位は高くなかった。

最後に、今後の研究の展開の可能性について述べる。本研究では福岡空港のハード面での整備に限定して考察したが、同空港の外航旅客定期航路の路線数の推移を併せて考察することでより現実的な考察が可能となりうる。また外航貨物航路などビジネス面での影響を含めることでより複合的かつ精緻な分析が可能となる。